

聖書劇の可能性

—*A Looking Glass for London and England* の場合—

佐野 隆 弥

1. 聖史劇の衰退

16世紀のイングランドにおいて、イコノクラスム（偶像破壊運動）は1530年代と1560年代とにおいて高まりを見せ、1570年代から80年代にかけてその目的をほぼ達成した、と歴史学は主張してきた。エリザベス一世によるアングリカン・チャーチ体制の再建とその整備・確立が進展するにつれ、カトリック的偶像崇拝の意味を負わされた聖史劇の上演が徐々に減少し、エリザベス一世即位後の20年間を経て、1580年代には多くの都市や地域で、聖史劇の上演が途絶えてしまったことはよく知られている。聖史劇の衰退について研究を行ったハロルド・C・ガードナーなどは、聖史劇の最盛期が16世紀テューダー朝であったと主張しているが、¹ 仮にそれが正しければ、逆にそれだけアングリカン・チャーチ体制の抑圧の力は強大であったということになるであろう。

しかし、その一方で、例えばケンダルやプレストンという町では、1603年まで聖史劇が上演されたという記録が存在し、² 他の都市においても1580年以降何度か聖史劇の復活が試みられていた。実際、14世紀の後半から200年にわたって存続してきた聖史劇が、文字通り表舞台から姿を消したとしても、イングランド人のメンタリティに浸透した聖史劇をめぐる記憶が、一つの地下水脈として、彼等の文化的反応を規定するファクター

として、1580年代や90年代にはいまだ根強く存在し続けたと考えることは、妥当性を有する判断だと考えられる。

こうした聖史劇消滅の流れの中で、商業演劇の世界では、聖書に取材した戯曲、いわゆる「聖書劇」がいくつか創作されている。以下に、シアター座建設（1576）からエリザベス一世の崩御（1603）までの狭義のエリザベス朝期の、商業演劇に関連すると思われる聖書劇をリストアップしてみる。

聖書に取材したと考えられる戯曲

（順に、推定創作年代・上演劇団等・台本保存状態。なお、データは、一部を除き Alfred Harbage, *Annals of English Drama 975-1700*, rev. S. Schoenbaum (London: Methuen, 1964) に拠る。）

- (1) *The Destruction of Jerusalem* (1584) コヴェントリー 散逸
- (2) *Job* (1587) 不明 散逸
- (3) *A Looking Glass for London and England* (1590) 女王一座 (?) 現存
- (4) *David and Bethsabe* (1592-94) 不明 現存
- (5) *Nebuchadnezzar* (1596) 海軍大臣一座 散逸
- (6) *Pontius Pilate* (1597) ペンブルック伯一座 (?) 散逸
- (7) *Abraham and Lot* (1599) サセックス伯一座 散逸
- (8) *Hester and Abasuerus* (1599) 海軍 (or 宮内) 大臣一座 散逸
- (9) *Judas* (1601) 海軍大臣一座 散逸
- (10) *Tobias* (1602) 海軍大臣一座 散逸
- (11) *Jephtah* (1602) 海軍大臣一座 散逸
- (12) *Joshua* (1602) 海軍大臣一座 散逸
- (13) *The Three (Two) Brothers* (1602) ウスター伯一座 散逸
- (14) *Samson* (1602) 海軍大臣一座 散逸

確かに14という聖書劇の創作数は、30年足らずの当該時期において、一つの（サブ）ジャンルとして多いとは言えない。しかし、地域共同体やギルドが主体となる形で維持されてきた聖史劇の抑圧・衰退とそれにとって代わる形で勃興してきた商業演劇、という形で通常理解されるエリザベス朝演劇の誕生をめぐる見取り図の中で、戯曲が聖書に取材することが極めて困難になった時期にあつてのこの数値は、むしろ重要な意味を示唆していると考えらるべきであろう。

アングリカン・チャーチ体制による抑圧と聖史劇をめぐる記憶とのせめぎ合い、聖書劇が聖史劇とどのような連関を有する存在であるのか、などは微妙な問題であり、聖書劇の大半が散逸しているため、実証的に検証することが困難な課題ともなっている。そうした中であつて、かろうじて残存する *A Looking Glass for London and England*（以下、*LGLE*と略記）は、*David and Bethsabe*と並んで貴重な現存作品と言われなければならない。本論は、聖史劇の創作・上演が困難な時期に、何故 *LGLE*の創作が可能であつたのかを、*David and Bethsabe*の分析で得られた知見をも援用しながら、検証することを目的としている。³

2. *LGLE*の主題と構造

トマス・ロッジとロバート・グリーンによる共作劇である *LGLE*は、1590年頃創作されたと推定されている。1594年3月5日には書籍出版業組合登記簿に登録され、同年四折本の形で出版され、1617年までに4版が刊行されていることから判断すると、比較的人気の高かつた戯曲であつたことが推測される。初演時の上演劇団は女王一座であつた可能性が指摘されており、1592年3月8日にはストレインジ卿一座によってリヴァイ

ヴァル上演も行われている。⁴ ロッジとグリーンがどの程度の計画性をもって共作に当たったのか、あるいは一方の中断を他方が引き継いだ結果の共作であるのか等は断定することが困難であり、おそらくは全体の構成をロッジが考案し、そこにグリーンが協力を要請されたのではないかという説が有力視されている。⁵

*LGLE*の舞台は古代アッシリアの首都ニネヴェに設定されていて、国王のラズニは属国の王達や寵臣にかしずかれながら権威を誇示し、その過程で、近親相姦的な婚姻や属国の王妃の略奪など情欲に溺れ、追従に盲従するという罪を犯す。このような主筋に対し、脇筋では飲酒と色欲に惑溺する徒弟連中と強欲な高利貸しとが、糾弾されるべき罪人として前景化されている。「鏡」をそのタイトルに掲げるためであろうが、*LGLE*のプロットは、非常に明瞭な形であるいはあからさまにとでも言い得る程に、キリスト教的罪を前面に押し出す。(ただし、返済期限日に意図的に返済金を受け取らずに債務者を欺き、そのことによって担保物件を没収し、裁判に訴え出た債務者に先回りをして裁判官等を買収するなど、この高利貸しには*LGLE*中唯一と言ってよい程、明瞭に同時代の社会的・経済的ニュアンスが付与されていて、この点、*LGLE*が単なる一時代前の道德劇や「鏡(鑑)文学」とは一線を画した、別種の戯曲作りが施されていることは、断っておく必要がある。)

*LGLE*の主題・構造面で注目すべき要素は3点存在すると考えられ、その第一の項目として最も顕著なものは、舞台上で上述のような罪悪が呈示される度に預言者ホセアがコーラス的に登場し、観客であるロンドン市民に向かって教訓と警告を発するよう、プロットが構築されていることである。ただし、古代都市ニネヴェで露見する罪科と、それを受けてのホセアのロンドン市民に対する警告との間には、高利貸し関連の場面後の忠告を除けば、基本的に有機的連関が設定されている訳ではなく、このことも

LGLE の特色ではある。一例を挙げておこう。

Where whordome raines, there murder followes fast,
As falling leaues before the winter blast.
A wicked life trainde vp in endlesse crime,
Hath no regard vnto the latter time,
When Letchers shall be punisht for their lust,
When Princes plagu'd because they are vniust.
Foresee in time, the warning bell doth towle,
Subdue the flesh, by praier to saue the soule.
London behold the cause of others wracke,
And see the sword of iustice at thy backe,
Deferre not off, to morrow is too late,
By night he comes perhaps to iudge thy state. (D4. 25-36)

ラズニィと彼の姉妹のレミリアとの婚姻の企てが、天罰の形でレミリアが落雷により惨たらしく絶命することで無に帰した後、寵臣ラダゴンの勧めでラズニィは属国の王妃アルイダを略奪し、アルイダ自身も障害となった夫を毒殺する——このような展開を受けてホセアがロンドン市民に発する警告が、上記の引用である。七大罪の一つ情欲を厳しく戒めるという共通項以外には、ニネヴェとロンドンとを結び付ける劇的根拠は皆無であり、悔悛を促す「鏡（鑑）文学」という性質を考慮に入れたとしても、稚拙な劇作術との評価を免れることは困難であろう。

LGLE の劇的構造の今一つ注目すべき点は、上記の古代アッシリアの物語に、旧約聖書の「ヨナ書」の物語が劇の中盤（第三幕相当）から接ぎ木されていることである。ニネヴェの墮落と退廃を主題とした *LGLE* 本体

の物語と旧約のヨナの物語は、最初並行状態で独立して展開されるが、ヨナが鯨の体内から解放され、神に命じられた使命を果たしにニネヴェへ向かうところから、この二つの物語は交わり出す。(ただし、ヨナが鯨に飲み込まれることになった直接的な原因である「ヨナ書」冒頭での出来事——ニネヴェに向かい神の言葉を伝達するよう命じた神に対するヨナ自身の不服従——に関しても、ホセアは非難と警告を表明しているので、*LGLE* 本体の物語とヨナの物語は、コーラスのホセアからは同一次元で、関連を有するものとして扱われており、また同時に観客もそのように受容することが劇作家によって意図されている点に、留意しておきたい。)

神の怒りによりニネヴェは 40 日後に滅亡するというヨナの警告は、結果的にニネヴェの王や民を悔悛へと導くこととなり、ニネヴェの破滅は回避される。この後プロットはほぼ「ヨナ書」に従って、ヨナの神に対する怒り⇒葡萄の蔓による天蓋とその破壊の挿話⇒被造物に向けられた神の慈悲の教示、という形で展開される。「ヨナ書」自体はヨナに対する神の諫めの言葉で唐突に終了し、ヨナ自身の反応は一切記述されていないが、*LGLE* では、ヨナは神の言葉を言祝い、ラズニイ等に神の赦しを伝えるよう改変されている。そして、従来教訓と警告を一手に引き受けていたホセアに代わり、大団円ではヨナ自らがロンドン市民に対して、ニネヴェの事例を鏡として罪を悔いるよう迫るのであるが、このコーラス役の交代、あるいは物語内の人物であったヨナのメタシアトリカルな次元への格上げは、ロンドン市民に対する鏡の呈示を主題に掲げる *LGLE* において、第三に注目すべき要素である。

3. 「ヨナ書」の特徴

「ヨナ書」が *LGLE* の主題とどのように関わり影響を与えているのか、

また聖書劇としての *LGLE* が成立するために、「ヨナ書」のどのような特徴や要素が機能しているのか、あるいは改変を受けているのかを理解するために、本節では「ヨナ書」の内容とその特徴を確認しておく。

「ヨナ書」の物語は、神（の言葉）がヨナに臨み、ニネヴェに行っておもてに呼ばれるよう命じるところから開始される。そしてその理由として、ニネヴェの悪事が神の下にまで上って来たことが伝えられる。しかし、ここで、神がヨナに命じた内容や悪事の詳細は説明されない。ヨナは神の命令に背き、神の下を離れて、船で遠方への逃走を試みるが、神は暴風を起し船は難破の危機にさらされる。この嵐がヨナの罪に由来することが同船者に判明した時、ヨナは自らを海に投げ入れるよう進言し、暴風は終息する。神は海中のヨナを大魚に飲み込ませたため、ヨナは死の淵から神に祈りを捧げるが、それが聞き届けられてヨナは陸に吐き出されることになる。神（の言葉）は再びヨナに臨み、ニネヴェに向かうよう命じる。今回は神の命令の内容——40日後ニネヴェが破滅することを人々に告知すること——が明示され、ヨナは与えられた使命を遂行する。ニネヴェの人々は国王から市民に至るまで、粗布を纏い断食を行い、神に祈り悔い改めたため、神は災いを下すのを思い止まる。この後の展開は、既述のように、ヨナの怒りを受けての神の慈悲の言葉が陳述されることになる。

「ヨナ書」は、「ヨエル書」や「アモス書」、「オバデア書」などと並んで、一般に「十二小預言書」と総称される小預言書群の一書である（ちなみに、観客に警告を与えるコーラス的預言者ホセアが中心人物を務める「ホセア書」も、この「十二小預言書」中の一書である）。他の預言書と比較した場合の「ヨナ書」の際立った特徴は、ヨナが「ヨナ書」の著者ではないこと、また「ヨナ書」が預言者に託された神の言葉の収録でもないことに尽きる。換言すれば、「ヨナ書」とは、一つの物語から構成された文

学的作品であり、ジャンルのには寓話もしくは知恵文学的教訓物語に属するものということになる。

物語としての「ヨナ書」には、特定の場所や年代を指示する表現が乏しいことから、「ヨナ書」はある歴史的事実に基づいたヨナの伝記あるいは歴史物語ではなく、むしろヨナとヤハウエとの関係もしくは対話を基本とした作品であることが、先行研究によって指摘されている。⁶ だが、そのように解釈した場合、「ヨナ書」冒頭におけるヨナの神に対する不服従や、終末部におけるニネヴェ破滅の撤回に対するヨナの怒りが、何故生じるのかを理解することは困難である。

「ヨナ書」の主題に関しては諸説存在するが、一般には（一）異邦人が改宗しヤハウエを崇拝すること（ヨナが逃亡する際同船した水夫たちやニネヴェの民）、（二）ヤハウエが異邦人に対して予告した災いを思い止まること、（三）異邦人に対するヤハウエの恵み・あわれみ、などが指摘されてきた。「ヨナ書」冒頭部のヨナの逃亡と「ヨナ書」終盤部でのヨナの怒りは、ヨナにとり共通した理由から招来した反応であったことが「ヨナ書」には記載されているが、それはヤハウエが寛容な、恵み深い神であることであった。おそらくはバビロン捕囚後のヘレニズム時代初期に成立したと考えられる「ヨナ書」において、ニネヴェに表象される異邦人とは、古代イスラエル国家を蹂躪し消滅させたアッシリアやバビロニアが意図されていたであろうが、その異邦人に対するヤハウエの配慮がヨナを戸惑わせ、アイデンティティや価値観の危機を招いたものと考えられる。

ところでこの点に関し、*LGLE*の作者たちは観客への情報提供を怠ってはいない。第三幕に相当する部分の冒頭に登場したヨナに、ロッジとグリーンは独白を語らせているが、その中に次の台詞を織り込んでいるからである。

Where is thine [=God's] arme to laie reuengefull stroakes
Vpon the heads of our rebellious race?
Loe *Israell* once that flourisht like the vine,
Is barraine laide, the beautifull encrease
Is wholly blent, and irreligious zeale
Incampeth there where vertue was inthroan'd. (D4v9-14)

LGLE の作者たちは、後半部のアクションを支える中心人物の一人であるヨナに、明確な心理的根拠や動機を付与した上で、「ヨナ書」の物語を *LGLE* の前半部から後半部への折り返し点へと接続させるのであるが、この操作を通してヨナ自身の変容——偏狭な民族主義者から異民族との平和的共存主義者へ——を観客が受容することを容易にし、さらに（「ヨナ書」本体には記述されていない）ヨナによる神の言葉の言祝ぎという改変を実現させるのである。

4. *David and Bethsabe* の場合

聖書劇としての *David and Bethsabe* の創作と上演はいかにして可能となったのか——本劇を中心にこの課題に取り組んだのが、アナリース・コノリーのモノグラフである。⁷ 彼女の論考は、結論から言えば、この聖書劇の上演を海軍大臣一座（ノッティンガム伯一座）による旧作レパトリー（取り分けクリストファ・マーロウのレパトリー）の再利用という戦略の中に捉えている。彼女の根拠を列挙すると、(一) マーロウの遺産を有効活用しようとする劇団にとって、タンバレイン的な「戦う王」の類型が、例えばダビデやネブカドネツアルといった形で、旧約聖書に多く見出だせること、(二) スペインとの緊張関係に置かれていたイングランド

が、ペリシテ人との抗争にさいなまれていたイスラエルとアナロジーの関係になっており、その延長線上に「戦う王」としてのダビデとエリザベス一世が重ね合わされ、観客のナショナリズムを刺激したであろうこと、(三) 1600年から1602年にかけて、*Josbua* や *Samson* など数本の聖書劇が集中的に創作されているが、これらのタイトルロールはいずれもタンバレインばりの人物であり、このことは、この時期のフォーチュン座の建設とエドワード・アレンの再登板との関連性が高いこと、となる。

前述のリストにあるように、およそ30年間で14本しか創作されなかった聖書劇が、世紀の変わり目前後にその半数以上が上演されるという現象の背後には、実際、コノリーの主張するような、劇作を取り巻く外からの事情があったのかも知れない。しかし、同時に、われわれとしては、それだけの数の戯曲が聖書に取材することが可能であった、という事実にも注目しておく必要がある。本節では、*David and Bethsabe* の場合、聖書劇を生み出す要因として、どのようなことが考えられるかに関して検証を行う。

マイケル・オコネルは、1580年代以降、演劇が聖書に取材することはできなくなると指摘している。⁸ 確かに大勢はそうであったのであろうが、同時に、聖書に取材した戯曲の存在という反例があることも事実である。*David and Bethsabe* に限ってみても、上演もされ、また書籍出版業組合登記簿に登録された上で出版もされているところから見れば、宗教関係者の検閲を受けている可能性も否定できない。こうした、聖書に取材することの困難さの問題は、一つの仮説として、原理原則的なものではなく、上演検閲の場合同様プラグマティックな側面を有する問題であった、つまり取材対象の題材の問題もさることながら、内容処理の比重もかなりあったのではないか、と考えることができるであろう。

David and Bethsabe の材源である「サムエル記」は、歴史書であると同時に、古代文学の傑作の一つとして、旧約聖書の中でももとより物語性の高

い一巻として知られているが、ジョージ・ピールは、その中でも完結性の強いダビデの姦淫とアブサロムの反逆と失墜のストーリーを選抜し、相互に絡み合う二本の筋として本劇を構成している。また、聖史劇を衰退させる要因となった偶像崇拜の見地から見ても、「サムエル記」そのものには供物を神へと捧げる祭儀的シーンが頻出するとしても、ピールが取材した部分にも、また彼が描き出す場面にも、当然とは言え、そうしたものが露骨に感知される箇所はない。

David and Bethsabe で生起する事件はすべて、二つの出来事——すなわち、ダビデの姦淫と間接的殺人、およびアブサロムの妹タマルのレイプ事件——に端を発する。「サムエル記」では、ダビデの姦淫とウリヤの間接的殺害という一連の出来事が終了した後に、タマルのレイプ事件が配置され、兄アブサロムによる復讐・国外逃亡・ダビデとの和解・反乱蜂起という形で物語は展開してゆく。ピールはこの流れに工夫を凝らし、ダビデの姦淫とウリヤの間接的殺害とのちょうど真ん中に、タマルのレイプ事件を設定することで、ダビデの姦淫から起こる物語と、タマルのレイプから歪み出すアブサロムの一連の物語が、材源よりもはるかに強固に絡み合った二本の糸として、相互に結びつく二重螺旋として、観客に提示されるよう戯曲の構成を試みている訳である。

そしてこうした創意工夫から生じる効果が、ダビデの“humanization”であり、軍司令官ヨアブの一層の冷徹な政治化であると考えられる。“humanization”という用語には、材源「サムエル記」におけるプラグマティックな政治家としてのダビデの機能の希薄化と、それに伴う人間的情愛を備えた人物への変容だけでなく、絶対神ヤハウエを中心とした旧約の物語の、人間中心化という意味をも含めて本論では使用している。

「サムエル記」全体の枠で捉えれば、ヤハウエの下、イスラエルの民を指導する国王としての道を歩むダビデではあっても、ピールの

“humanization”の操作を通して、彼は息子達の犯罪や病に煩悶し、また別の息子の反逆に苦悶し、エルサレムを追われながらも、その息子の死に打ちひしがれる、悲嘆と苦悩に翻弄される存在へと書き換えられている。

*David and Bethsabe*の上演劇団が海軍大臣一座であり、ダビデを演じたのがアレンであったのかどうかは、今の段階では判断がつかないが、少なくとも筆者には、コノリーが主張するような形で、こうしたダビデ像にタンバレインの振る舞いを感じ、その重ね合わせの向こうにナショナリズムを読み取ることは、難しいように思われる。彼女の論点の中心である商業性に仮に妥協点を見出だすとすれば、ピールの、職業劇作家としての、聖劇に対する民衆の根強い指向への配慮と、大学才人としての古典的素養に裏打ちされた材源の人間化——この両者が交差するところに誕生したのが、*David and Bethsabe*であり、この劇の演劇史的位置取りも、そのようなところにあるのではないかと考えられる。

5. LGLE の場合

LGLEの創作を可能ならしめた条件を探るために、*David and Bethsabe*の事例を基に検証してみる。後者が商業演劇の世界において上演劇として成立するには、

- (一) 材源の「サムエル記」の物語性が高い。取り分け、ダビデの姦淫とアブサロムの反逆と失墜の物語が完結したストーリーを有している。
- (二) 登場人物を人間的情愛を備えた人物へと変化させている。
- (三) 偶像崇拝的要素や祭儀的シーンができるだけ回避されている。
- (四) 絶対神ヤハウエの表象に十分な配慮がなされている。

などの要件が必要であったように考えられる。では、LGLEではどうか。

第一の項目、材源の物語性だが、「ヨナ書」自体が短い物語で構成された、時に短編小説と形容される程の作品であることに加え、既述のように、寓意もしくは教訓を作品の効果として明瞭に意図した構造を備えているため、作品の有機的統一性は極めて高い。その上、「ヨナ書」は神の預言の集合体ではなく、またヨナ自身が作中の登場人物でもあるため、物語としての「ヨナ書」のフィクション性も十分高いものとなっている。こうした「ヨナ書」の特性が、ロッジとグリーンが *LGLE* の前半部に書き込んだニネヴェを舞台とする道徳的退廃の物語に、違和感や段差を観客に感じさせることなく「ヨナ書」の物語を接合させることに、大きな貢献を果たしていることは間違いない。

第二の点に関して、実際的な政治家から人間的感情に溢れた人物へとダビデを改変させた *David and Bethsabe* と比べて、*LGLE* におけるヨナの変化は小規模と言わざるを得ない。しかし、この現象を別の側面から検討すれば、ロッジとグリーンはもとより物語性の高い「ヨナ書」を基本的にはそのまま利用することができた、ということの意味している。作家達が部分的に翻案の努力を強いられたのは、第三節ですでに指摘したように、神の預言伝達の使命を回避したヨナの動機と、ニネヴェ滅亡の中止理由に対するヨナの反応を追加記述することであった。そしてこの操作を通して、「ヨナ書」は、祖国イスラエルの恥辱に苦悩するヨナの姿と、神の御業を受け入れそれを言祝ぐヨナの振る舞いとで補完され、ここに *LGLE* 版の“humanization” とでも呼ぶべき改変が達成されることになる。

だが、第三・第四の項目については、*LGLE* がかなり厄介な要素を抱えていることは事実である。イコノクラスムの見地から見た場合、ヤハウエを舞台上に現前させることはもちろん不可能である。実際、ヨナに臨んでいたものは「ヨナ書」の場合ヤハウエ（の言葉）自身であった訳だが、*LGLE* ではそれが天使へと改変され、天使が神の言葉を伝達するという仕

掛けに変更されている。このようにして *LGLE* は神の直接表象を回避し得た訳だが、そのことと引き替えに天使の現出という手段（しかもかなりの高頻度の登場）に依存せざるを得なくなる。また *LGLE* には、ヨナの警告を受け、自らの悪業に絶望した高利貸しを、自殺へと誘う墮天使が登場する場面も（短くはあるが）存在する（H4.20-22）。さらに、いっこうに道徳的退廃を改めようとしないうラズニイの宮廷には、儀式用のかぶり物を着用した太陽の神官たちが登場し、死者の亡霊がさまよい歩き、神々の像は倒され、祭壇が血により汚される様子を語り（Gv31-G2.6）、またその直後には、雲間から燃えさかる剣を威嚇的に振るう腕が出現する（G2.15-17）。そして *LGLE* の終盤、第五幕に相当する部分には、ヨナの警告を受けたニネヴェの王や民等が、懺悔のための粗布を纏い、断食を行い神に祈りを捧げる場面が現出する。

こうした事象が偶像表象に該当するのかどうかは、上演環境に左右される微妙な問題であり、一概に判断をすることは難しい。そして、*LGLE* は上演もされ出版もされた戯曲であるという事実を何よりも忘れてはならない。偶像表象の考察について重要なのは、偶像表象断定に関する何か一般的基準が存在した訳ではなく、個別対応的な考慮のもとに創作がなされたと推測することであろう。例えば、天使や墮天使の登場に関しては、*LGLE* の推定創作年代に比較的近い *Friar Bacon and Friar Bungay* (1589) や *Doctor Faustus* (1592) に類例を確認することは可能であるし、カトリック聖職者を連想させる神官についても、*I & II The Troublesome Reign of King John* (1588) の、聖餐台を前に宣誓を強要するフランス皇太子ルイの振る舞いの中に、カトリック司祭をはるかに強力に喚起する要素が内包されている点を指摘しておく。もちろん、ここに言及した各戯曲において、上述の表象が可能であったのは、正に個別的な理由によるものであり、⁹ 先例や類例があるからといって、それがそのまま *LGLE* に適用できる訳ではないこ

とは言うまでもない。

では、*LGLE* の創作を可能ならしめた条件として、どのようなものが考えられ得るか。*LGLE* の場合、やはり本劇の構造と材源そして創作の時宜性が、安全装置として複合的に機能していると想定することが妥当であろう。本論でこれまで展開した議論を踏まえ、最終的結論として三つの項目を指摘しておく。

(一) 戯曲全体が「鏡（鑑）文学」という枠組みの下に位置付けられているため、その内部で語られ表象される悪徳や罪科などが包含されていたとしても、反面教師的役割のもと許容されやすい。

(二) 物語の時間的スキームが、厳密な特定が困難な古代の近東に設定されているため、そうした遠隔化が戯曲内の記述を遠景化する。

(三) *I & II The Troublesome Reign of King John* 同様、無敵艦隊来襲による反カトリック感情の高揚を一種の隠れ蓑として利用した。¹⁰

注

* 本論は、平成 23～25 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 (C)））「エリザベス朝演劇文化の誕生に作用した大学才人と英国国教会の接触に関する動態的研究」（課題番号 23520282）の成果の一部である。

- 1 Harold C. Gardiner, S.J., *Mysteries' End: An Investigation of the Last Days of the Medieval Religious Stage* (1946; Hamden, CT: Archon, 1967) 46-93.
- 2 Gardiner 92.
- 3 *David and Bethsabe* の分析に関しては、佐野隆弥、「『ダビデとバト・シェバ』——1590 年代の聖書劇をめぐって——」、『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集——』（東京：英宝社、2010）pp. 179-189 を参照。
- 4 E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 3 (Oxford: Clarendon P, 1951), p. 328.
- 5 George Alan Clugston, ed., *A Looking Glasse for London and England by Thomas Lodge and Robert Greene: A Critical Edition* (New York: Garland, 1980) 63 and 91. *LGLE* からの引用も同書に拠る。

- 6 本論における「ヨナ書」関連の記述は、以下の文献に拠る。西村俊昭、『ヨナ書注解』（東京：日本基督教団出版局、1975）；フランシスコ会聖書研究所、『聖書 原文校訂による口語訳 ヨエル書、アモス書、オバデア書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書』（東京：中央出版社、1986）；秋山学、『『シラ書』における「知恵」—アレクサンドリアのクレメンスとパウロの神学に照らして—』、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 言語篇』60巻（2011）pp. 1-23。
- 7 Annaliese Connolly, “Peele’s *David and Bethsabe*: Reconsidering Biblical Drama of the Long 1590s,” *Early Modern Literary Studies* Special Issue 16 (2007):9.1-20.
- 8 Michael O’Connell, *The Idolatrous Eye: Iconoclasm and Theater in Early-Modern England* (Oxford: Oxford UP, 2000).
- 9 例えば、*I & II The Troublesome Reign of King John* の場合、明瞭に書き込まれたプロパガンダ的反カトリックのイデオロギーが、該当場面の偶像表象性を相殺もしくは覆い隠していると考えられる。
- 10 一例として、ヨナによる *LGLE* のエピローグ（的台詞）から、次の一節を引用しておく。“Repent O London, least for thine offence, / Thy shepheard [= Elizabeth I] faile, whom mightie God preserue, / That she may bide the pillar of his Church, / Against the stormes of Romish Antichrist:” (14v25-28).